

ミステリ読書案内

2023. 6. 5 発行元

第484号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回も私にとってはお馴染みの作家が並んだ。新作が出るとすぐに新刊書店で買うと決めている作家たち。短時間で一気に読み終えることができる。

「新刊情報」調べ

最近ネットでは「新刊情報」を検索するようになった。文庫本は「文庫本新刊」で、他は「文芸書新刊」で調べる。文庫ではライト系の本がかなりの数出ていることがわかる。実際にどの程度の収益を得ているのかは私にはわからないが、想像以上の数だ。「文芸書」という括りには「ミステリ」以外にも含むのでこちらでもそれなりの数出ている。これだけから見ると出版不況を感じさせないのだが、大きな収益が見込める本

は限られているということだろう。

チェックした後、購入する本のリストをメモする。買わないけれども、図書館に入ったら借りようと思う本も何点か選び出しておく。こう前もって準備できるのは、SNSで情報が簡単に見れる現在だからできることだと思う。有難い有難い。

この『ミステリ読書案内』の各号のテーマも新刊情報を元に事前に計画を立てることができるようになった。未知の作家の本には手を出せないが、馴染みの作家の本を楽しむに待つこの頃である。

中山七里「祝祭のハンクマン」

1月に文藝春秋から出た本。『オール讀物』に連載されたもの。中山七里としては新しいパターン。法で裁けない悪人を始末するという「私刑執行人」という形。

主人公は警視庁捜査一課に所属する春原瑠衣。彼女の父親が勤めているヤマジ建設の資材課長が歩道から付き飛ばされて走ってきたトラックにはねられて死亡する事件が発生。続いて同じ会社の経理課長が駅の階段から転落死したようにみえる状況で発見される。瑠衣は父に事情を聞こうとするのだが…。その父親も…。一連の出来事の裏に隠れているのは…。瑠衣は捜査から外され動きが取れなくなる。そこに声を掛けてきたのは警察を退職した探偵？

佐藤青南「ホワイ・ダニット行動心理捜査官・楯岡絵麻」

4月に宝島社文庫から出た本。ほぼ二年ぶりの新作。シリーズ十作目。このシリーズは長編の形と短編集とがあるのだが、今回は4編収録の短編集。相手のしぐさから嘘を見抜く刑事・楯岡絵麻が主人公のミステリ。

第一話の『殺人動画にいいねとチャンネル登録をお願いします』は、カップルの日常生活を動画として流す(くはるみきチャンネル)が舞台。多くの人が見ている中で、男性が殺される場面が流れてしまった。間もなくストーリーカー行為をしていた女が捕まるのだが…。なぜ殺してしまったのがよくわからないのだ。動機を追求するために絵麻と西野のコンビが動き出すことに。絵麻の鋭さが今一つピリッと決まらないところがやや不満…。

今野敏「署長シンドローム」

3月に講談社から出た本。『小説現代』に一挙掲載されたもの。一応『警視庁FCシリーズ』の第三弾ということになる。でも、竜崎伸也が抜けた後の大森署が舞台でもあるので、最近の今野作品は重なり合っている形が増えている。

大森署に藍本小百合が新しい署長として着任した。副署長の貝沼警視も警務部長の斎藤警部も千客万来で気を使う場面の連続となる。そんな中、羽田沖での武器と麻薬取引の内報が入り、署内は混乱に陥る。さて、新任の藍本署長の采配は…。隣の所轄、警視庁上層部、厚労省、海上保安庁…それぞれが微妙に張り合っている…。

太田忠司「名古屋駅西喫茶ユトリロ 龍くんは引っ張りだこ」

4月にハルキ文庫から出た本。シリーズ第四作になる。大学を休学して、名古屋の祖父母が経営している喫茶ユトリロで暮らしている鏡味龍(「とおる」と読む)くん。いろんな方向から日常生活での謎を持ち込まれ、それを解決していく内容。今回は、今までにも増して「ご当地グルメ」の出番が多い。「どて煮」「天むす」「饅頭」「イタリアンスパゲッティ」「味噌カツ」と名古屋そのもの。謎の部分はやや薄くなった。

第一話。コロナ禍で飲食店は大変。龍くんはグルメリポーターとして駆り出される。牛肉専門の肉屋さんで総菜の宣伝をする。牛すじだけで作ったはずの「どて煮」の中に豚のモツが入り込んでいたのはなぜ? 第二話では異色の味探して、「天むす」のレシピを考えるのが課題。「天むす」というのは小さなおにぎりの中に海老の天ぷらが入ったものらしい。……。本書では、龍くん自身の「将来何をやってらよいかかわからない」が大きなテーマになっている。結末で解答を出すことになるのだが…。